歴史の響き～風鈴が語る物語

日本の夏に軒下などに吊るされ、涼しげな音が鳴る風鈴は、夏の風物詩として親しまれています。

風鈴は、古代中国で仏堂や仏塔の軒に吊り下げられていた「風鐸（ふうたく）」が起源とされています。風鐸は青銅製や真鍮（しんちゅう）製の鈴のことで、風を受けるとカランと力強い音を響かせ、寺院建築を飾る荘厳具（そうごんぐ）として設置されていました。

この風鐸は仏教とともに日本へ伝来しました。法隆寺の五重塔の相輪の四隅に吊るされている風鐸は、現存する日本最古のものとされています。日本に伝わった風鐸は長い歴史を経て、やがて現在の風鈴という姿に変化してきたのです。


日本の夏の風物詩として親しまれるガラス風鈴。（イメージ画像）

一、風鈴の起源は古代中国に遡る

風鐸（ふうたく）の「鐸」は、もともと古代中国の打楽器の一つでした。そして仏教がインドから中国に伝来した際、仏塔に小さな鈴を吊るす風習も同時に伝わりました。その影響を受け、中国では、従来の「鐸」が寺院の屋根や仏塔に設置されるようになり、やがて「風鐸」へと変化を遂げたのです。

西暦547年に成立した『洛陽伽藍記（らくようがらんき）』は、中国古代の仏教史書で、北魏時代における歴史、地理、仏教、文学、そして歴史上の人物や故事について記述されています。その中には、洛陽にある永寧寺（えいねいじ）について、以下のような記述があります。

「この境内には九重の塔が一基あって、木を組み上げて建てられ、高さは九十丈（約260メートル※実際の推定復元高は約130～140メートル）。……塔は九層で、そのどの四角にも金の鈴（鐸）が吊るされ、上下全部を合わせると百三十もあった。……風のある秋の夜などは、　金の鈴（鐸）の音が響きあって、その鏗鏘（こうしょう）たる調べは、十余里にまで聞こえた。」『洛陽伽藍記』より

この記述は、北魏の時代において、風鐸がすでに仏塔の装飾として広く用いられ、寺院の景観として完全に定着していたことを示しています。しかし残念ながら、永寧寺は現在、遺跡が残るのみとなっています。

一方、現存する有名な風鐸の塔としては、1576年に建立された、現在の北京西郊にある慈寿寺（じじゅじ）塔が挙げられます。この八角13層の密檐（みつえん）式煉瓦造りの仏塔には、合わせて3304個もの風鐸が吊るされていたとされています。3000個を超える風鐸が風に揺られ、風情ある音色を四方に響かせる景観を想像すると、今でも胸を打つものがあります。

現在、お寺自体は失われ、この塔のみが佇んでいますが、当時の豊かな風鐸文化を今に伝える貴重な歴史的遺産となっています。

二、なぜ寺院の建築物に風鐸を吊るすのか

風鐸は当初、占いや風向きを判断するために用いられていましたが、時代が進むにつれて、より深い宗教的な意味合いが与えられるようになりました。

たとえば、風鐸の表面には経文や真言が刻まれるようになり、人々の祈願や邪気払いなどの願いが込められるようになったのです。また、風に吹かれて響くその音色は、仏道を歩む人々への警鐘でもありました。修行僧に対しては「修行を怠らないように」、世間の人々に対しては「名声や利益などの煩悩に溺れないように」と、それぞれ自省や戒めを促す意味を持つようになったのです。

さらに、実用的な役割もあったと考えられています。多くの寺院は山や森の中に建てられており、木造の屋根はスズメなどの鳥が巣を作りやすい環境にありました。そのため、風鐸が風に揺られて鳴る音によって鳥たちを驚かせ、巣作りを防ぐ「鳥よけ」の効果も期待されていたのです。

三、日本への伝来と風鈴への変遷

風鐸（ふうたく）は、飛鳥時代から奈良時代にかけて、遣唐使によって仏教とともに中国から日本へ伝来しました。

当時の日本では、強風は流行り病や邪気などの災いを運んでくるものと考えられていました。そのため、風鐸の音が聞こえる範囲は「聖域」とされ、災いから守ってくれる魔除けとしてお寺の四隅に吊るされるようになったと言われています。

飛鳥時代の姿を今に伝える世界最古の木造五重塔（法隆寺五重塔）では、最上部にある金属装飾「相輪（そうりん）」に風鐸が吊るされており、これが現存する日本最古の風鐸とされています。各層の軒の四隅にも風鐸が吊るされていますが、これらは後世（鎌倉時代など）に交換されたものと考えられています。

なお、発掘調査による出土品ベースでの「国内最古級の風鐸」としては、日本初の本格的寺院である飛鳥寺の塔跡から発見されたものが挙げられます。これも当時は、塔の軒先に吊るされていたと推測されています。

平安時代から鎌倉時代にかけては、その神秘的な音が「聞こえる範囲には災いが起こらない」と信じられ、貴族たちが邸宅の軒先に吊るして厄除けとして使い始めました。これに伴い、風鐸はより軽やかな、小ぶりの金属製の鈴へと姿を変えていきました。

やがて、鎌倉時代の僧侶・法然上人（ほうねんしょうにん　1133～1212）は風鐸を「風鈴（ふうれい）」と名付けました。それまでの「ガランガラン」と鳴る魔除けの道具から、「極楽浄土の美しい音色を連想させる、清らかな鈴」へと捉え直したためです。

その後、室町時代から江戸時代にかけて、風鈴は武家や貴族の間で縁起物として親しまれるようになります。さらに江戸時代に入ると、長崎経由で伝わってきたガラス技術によってガラス製の風鈴が作られるようになり、一気に庶民の間で定着し、呼び方も風鈴（ふうりん）へと変化していきました。

四、日本の夏を彩る涼やかな風鈴

今、風鈴は、主に夏の軒下などに吊るす小型の鈴として親しまれています。風で短冊が揺れると、内側の「舌（ぜつ）」という部品が本体に当たり、軽やかで涼しげな音を奏でるという仕組みです。

そんな風鈴は、素材や製法によって異なる音色や表情を楽しめます。ガラス製の風鈴は、チリンと高い音色と、透き通って涼しげな見た目が人気で、鉄や真鍮を用いた金属製の風鈴は、心に染み入るような長い余韻の響きで人々を惹きつけます。

その一方で、風鈴の前身である風鐸（ふうたく）の多くは、今や歴史的な国宝や重要文化財となっています。

法隆寺などの歴史的建築物では、台風などの強風時に風鐸の部品が落下し、建物を傷つけたり参拝客に危険が及んだりするのを防ぐため、あえて音が鳴らないように固定するなどの措置が取られているケースも少なくありません。そのため、残念ながら古刹（こさつ）に吊るされた風鐸から、自然な音色を聞くことがほとんどできないのが現状です。

風鈴が響かせるチリンという涼しげな音の裏には、かつての風鐸の「沈黙の支え」があったのです。夏風とともに漂う風鈴の音色は、まさにそんな悠久の歴史を響かせる物語そのものなのです。

参考文献：

『洛陽伽藍記』　東洋文庫　平凡社　楊衒之　入谷義高（注訳）　1990年4月10日

（文・一心）

孔雀が羽を広げる美しさ

天界の楽園で、孔雀の乙女たちが舞い踊ります。優雅に、軽やかに、雲海を滑るように舞うその姿は、天上世界の壮麗さを映し出しています――。2026年の神韻芸術団の巡回公演では、中国古典舞踊『天空を舞う孔雀』において、孔雀の美しさを舞台上で見事に再現し、世界中の観客を魅了しました。

孔雀がもたらすその美しさを、私自身も以前、間近で体験したことがあります。

ずいぶん前、夫と一緒にリゾート地へ出かけた時のことでした。山荘の通路で突然、一羽の青い孔雀が悠々と歩いているのを見かけました。驚かせないよう優しく声をかけながら、そっと近づきました。そばまで行くと、孔雀はふっと体を震わせ羽を広げ、色彩豊かな輝きと華やかな美しさを放ちながら、私たちの挨拶に嬉しそうに応えてくれたのです。

孔雀が羽を広げた姿は、息を呑むほど美しかったのです。私はうっとりと見つめ、この美しい瞬間を永遠に心に留めたいと思いました。空が灰色に沈む寂しい季節でしたが、その孔雀はまるで万物に輝きを吹き込んでいるかのようでした。羽を広げたその瞬間、すべての時空が静止したかのような感覚に陥り、心の奥底から震えるような喜びが湧き上がってきました。

都会の喧騒の中では深呼吸をするのも一苦労ですが、あの時、孔雀を観ながら少し冷たい風を受け、山の中の新鮮な空気を存分に吸い込みました。そしてふと、思いを馳せるのです。この世界は本当に特別な場所です。この世界は本当に特別な場所です。人はここで苦難の試練を受けながらも、俗世を超えた美を味わい、魂の深いところにある本当の自分を感じることができるのですから。

伝説によると、かつて天柱山で、一羽の孔雀が仏様に拝謁しようと人ごみの中で首を長くして待っていましたが、お姿を見ることはできず、すっかり落胆してしまったそうです。しかし仏様はその孔雀の篤い信仰心に気づき、一筋の仏光を投げかけました。この神力に満ちた仏光が孔雀の体に当たると、たちまち多くの金色の円が浮かび上がり、まるで目のような模様となりました。孔雀の羽にある千もの「目」は、仏様がその信仰心を称えて授けた特別な贈り物のように、誠実な眼差しで世間を見つめています。孔雀が羽を広げて優雅に舞うたび、これらの「目」も瑠璃色の輝きを放ち、天上の美しい奇跡の一面を見せてくれるのです。

人々の太陽のような笑顔を見ると、私の心の中にも輝きが集まります。ふとした瞬間に人々の善行を目にすると、それがさざなみのように心の光を呼び起こすのです。こうして心に集めた一滴一滴が、長い年月を経て、私の心の中にも一羽の生き生きとした孔雀を形作りました。孔雀の鮮やかな色彩は、人々の「美」と「善」を描き出します。そして孔雀のまばゆい輝きは、心の昇華と絶え間ない自己超越を象徴しているのです。

おそらく、人々が信仰を求め、自分自身を正し、内面を向上させることで、遠い伝説の中にしかないような奇跡を現実にも起こすことができるのでしょう。その美しさは、時間の束縛も空間の隔たりも超えて存分に発揮され、惜しみなくこの世を彩るのです。

孔雀が羽を広げる姿は、人類の歴史における繁栄の縮図のようであり、眩い光を凝縮しています。すべての生命の心の中には、最も輝かしい一面があります。無私の心でそれを表せば、世界に輝きが訪れます。歴史の幾多の変遷は、人類が奇跡ばかりに頼って生きてきたわけではないことを証明していますが、それでも私たちの周りには驚きに満ちた奇跡が数多く秘められています。神話伝説も、奇遇も、絶えず自己を向上させれば、奇跡の存在を目の当たりにできるのだと私たちに語りかけているかのようです。

孔雀が広げるのは、俗世を超えた羽の美しさだけでなく、一つの生命が到達した「境地」でもあります。この世界に美しさと善が存在するからこそ、孔雀が羽を広げた瞬間の輝きがいっそう際立つのです。慌ただしい日々を振り返ってみると、心からの「善」だけが、その一瞬を美しく、そして永遠なものにできるのだと気づかされます。

（文・阿容／翻訳・愼吾）

安心！快速！熱情！成功率高！
本人不用去入管 申請手續全代理 愛知 行政書士 玉田事務所
☑ 専門為中部地區中国人申請簽證　☑ 年中無休　☑ 初次電話詳談免費 中國語OK!
入管ビザ（簽證）申請専門
会社設立・投資経営
☑留学簽證轉成投資経営簽證
☑人文、技術、技能簽證轉成投資経営簽證
☑国内親屬、友人来日、投資経営
定住、永住、帰化
☑日本人配偶者簽證轉成永住、帰化
☑離婚後日本人配偶者簽證轉成定住
查証業務
☑各種簽證取得・更新・変更
☑国際結婚、家族滞在
☑日本人的配偶者
☑人文、技術、技能、投資経営など
法務業務
☑不法滞在者的在留特別許可
☑申請假釋
☑簽證被拒後，再申請
☑各種理由書作成

9:00～18:00 中国語SB 090－1729－8181
日本語SB 080－4123－8572
日本語 普通電話 0587－81－8100
FAX 0587－81－8102
〒492－8143
愛知県稲沢市駅前2-4-4　スカイル21　101
http://www.visa-aichi.com
入國管理局承認行政書士
玉田和弘